

專 門 分 野

基礎看護学

1. 考え方

基礎看護学は、専門分野に位置づけられている。これから学ぶ各看護学を学習する基盤となるものである。

看護の対象はあらゆる発達段階の人であり、その対象に対し個別性のある看護を実践するためには、単に生理的側面のみでなく心理・社会的側面を含め、その個人を総合的にとらえなければならない。また看護とはあらゆる健康状態に応じて、必要な支援を行うものである。つまり、健康の保持増進、疾病予防、健康障害からの回復、社会復帰を目指して最大限の能力が発揮できること、その人らしい死が迎えられるような援助など、対象および家族を含めた個別的な支援を行うことが求められている。

看護の場は病院だけでなく、施設や地域で生活している人も対象としている。看護の目的を遂行するには、看護実践の基礎となる必須概念（人間・健康・環境・看護）の理解を踏まえて、問題解決能力・人間関係能力・専門的技術の実践能力の習得が必要である。また、すべての看護は各人の看護観を基に構築される。本校本学科では科学的根拠に基づき、対象にとって安全・安楽であり、自立をさまたげない看護実践ができるよう、基礎的な能力の育成を目指すと共に、経験を意味づけ、各人の看護観を深めるように講義および実習を構成している。

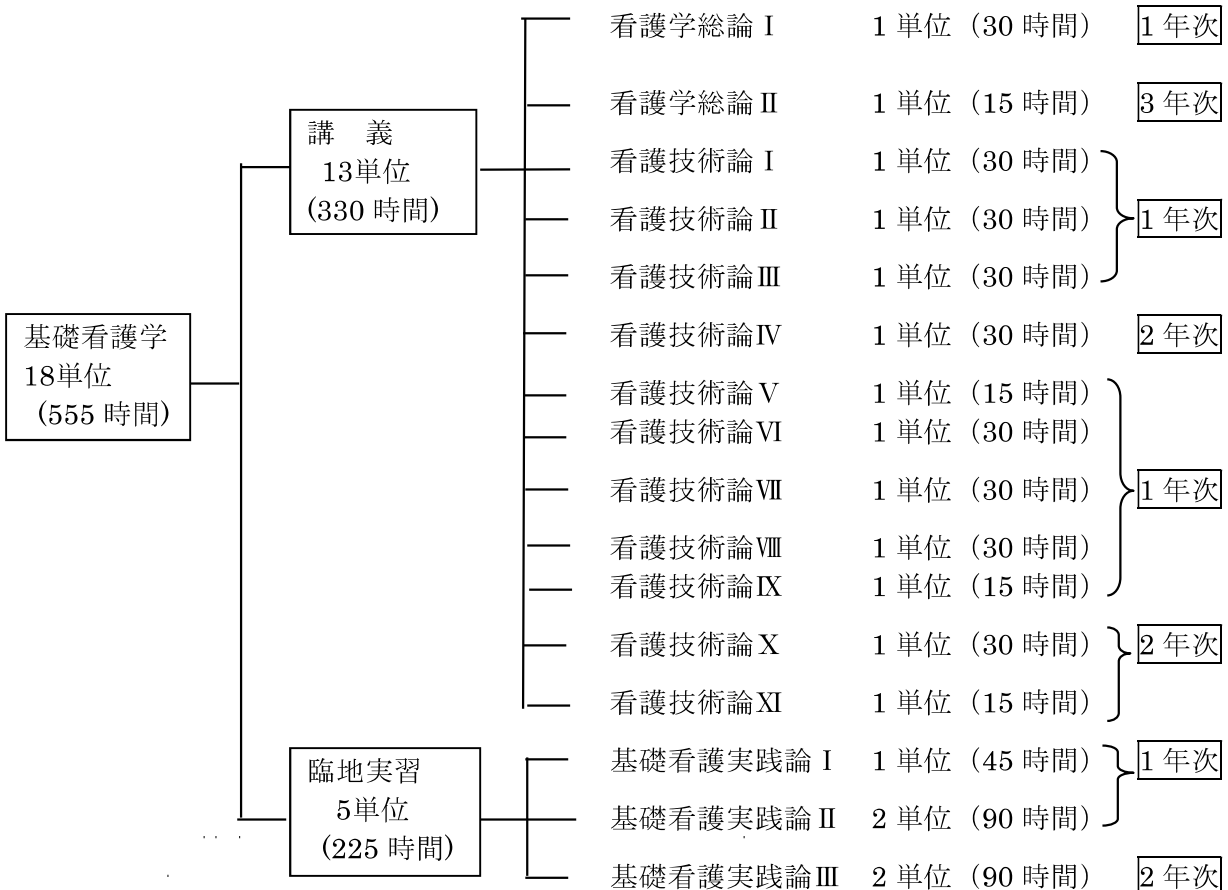
2. 目的

看護の概念を理解し、応用・発展させるための基礎知識・技術・態度を習得する。

3. 目標

- 1) 看護の概念と変遷について理解できる。
- 2) 看護の機能と役割について理解できる。
- 3) 看護を実践するための基礎となる看護技術を習得する。
- 4) 看護の対象である人間と対象のもつ健康状態に応じた看護について理解できる。
- 5) 看護とは何か自身の看護観を深める。

4. 構成



学科目 (単元)	看護学総論Ⅰ	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 30 時間	1 年	前期
目的	看護の対象である人間を理解すると共に、看護専門職としての機能と役割について理解する。看護の歴史的変遷や看護理論の学習を通して、看護の本質や目的・活動内容について学びを深め、自分なりの看護観を持ち、看護実践のためのアプローチ方法を考えられることを目指す。看護を取り巻く社会情勢の変化を理解し、地域、看護行政、看護サービスについて関心を持つ。さらに、看護倫理を学び、看護に求められる責任と安全のための対策・職業倫理および専門性を高めていく思考と構えを身に着ける。						
到達目標	・看護とは何か、自身の看護観を表明する。 ・看護における人間・健康を定義する。 ・看護実践における法的基盤を説明する（看護の定義・責任・免許の意味・守秘義務）。 ・看護師の倫理綱領を読み解く。 ・患者の意思を尊重するための取り組みを述べる。 ・ロイ看護理論「適応システムとしての人間」について説明する。						
内容	1. 看護への導入、看護とは（専門職としての看護師）、協同学習について（看護トピックス） 2. 看護トピックスの共有、看護の変遷・看護を構成する概念・定義・看護の役割と機能、ケアリングの概念 3. 看護の対象の理解（こころとからだ・人間の暮らし） 4. 国民の生活と健康（保健・医療・国民健康づくり） 5. 看護の提供者（職業としての看護・看護と法律・看護職の資格と養成） 6. 看護における倫理（なぜ倫理を学ぶのか・看護者の倫理綱領・倫理原則） 7. 看護における倫理（臨床の場での倫理について考える）GW 8. 看護の提供のしくみ（サービスとしての看護・診療報酬） 9. 看護を考える（「看護とは何か」を探究する事の意味） 10. 看護実践を導く看護理論①（ナイチンゲール・ニード論・相互作用論） 11. 看護実践を導く看護理論②（セルフケア理論・システム理論） 12. 看護理論の発表 13-14. 本校が用いる看護理論：ロイ適応看護モデルの概要 15. 学習時間あり・単位認定試験						
教育方法	講義・協同学習（学生同士の対話、教え合う・学び合う）・ペアワーク・グループワークを取り入れ、アクティブラーニングで学習を進めます。 1. 自分の学びが仲間の役に立つように責任を負う。 2. 仲間の学びが自分の役に立つと価値を認める。						
履修上の助言	この授業をとおして、自ら「調べる」、「考える」主体的学習姿勢を身につけてください。新聞・メディアで取り上げられている医療・看護に関する情報に敏感になりましょう。看護理論の学習は看護技術論Ⅲ（看護過程）の講義につながりますので、教科書・参考書をよく読み、復習により理解を深めてください。『語句』『専門用語』はもちろん、普段使っている『語彙』を再考し、自分の言葉で説明できることを心掛けてください。						
参考文献	テキスト	系統看護学講座「看護学概論」 「ザ・ロイ適応看護モデル」			医学書院 医学書院		
	参考書	看護覚え書き ― 看護であること看護でないこと ― 看護学生の勉強と生活まるごとナビ			現代社 日本看護協会出版会		
評価方法	筆記試験 学習課題等						

学科目 (単元)	看護学総論Ⅱ	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 15 時間	3 年	前期
目的	すべての看護行為は倫理的判断に基づいて実施されている。医療従事者としての人間性、倫理観を豊かにし、柔軟な感性と知的な思考能力を持つ看護師となることを目指す。 事例検討を通し、“気づき” から“問題解決” へ向けて、患者・家族の立場を考え、異なる価値観や選択肢を検討する力を養い、自己の考えを深める。授業後は、学生自身が倫理的判断に基づいた行動(医療・看護行為)が取れるようになることを期待する。						
到達目標	・自身が経験したジレンマについて倫理原則に基づき分析する。 ・症例検討シートを活用し、異なる立場による価値の違いを整理する。 ・看護実践の場で直面する倫理的課題について、複数の選択肢を考え、倫理的判断を行う。 ・患者、家族にとって最善の利益は何か、推論し自身の考えを表明する。 ・患者・家族の意思を尊重した看護とは何かを述べる。 ・看護師（学生自身）が行う看護行為についてその理由を説明する。(看護の責務)						
内容	1. 看護職としての職業倫理、患者の意思決定、倫理的課題の事例、医療倫理の基本原則、倫理的問題へのアプローチ、Jensen らの症例検討シート（四分割表）による分析、協同学習による事例検討の進め方 2. 講義・グループワーク 事例の選択と分析（四分割表を活用し、問題を整理する） 3. グループワーク 事例検討（倫理的課題への対応）、 文献検索（先行研究、統計データ、判例、医療倫理に関する宣言、綱領） 4. グループワーク 文献検索、事例検討（ディベート） 5. グループワーク 資料準備（結論を導いた過程を中心にプレゼンテーションの準備） 6- 7. プレゼンテーション・まとめ 8. 単位認定試験（学習時間なし）						
教育方法	講義・協同学習・TBL（チーム基盤型学習） 臨地実習で経験した事例を基に事例検討を行う（文献検索・分析・討議・考察・発表）						
履修上の助言	倫理的意思決定は、倫理的感受性と道徳的推論能力が大きく関与し、これらの発達には知識と経験が必要です。感受性と推論能力がないと患者の尊厳や権利をめぐる問題を見過ごしてしまい、その問題に対し何をなすべきかを決定できなくなります。その能力を発達させるためには、倫理的行動の基準（倫理綱領）、医療者の倫理原則などについて学ぶことが効果的です。 各看護学領域における倫理、生命医療倫理学、看護関係法令の復習、夏休み中に事例検討のための文献検索を行ってください。						
テキスト・参考書	テキスト 系統看護学講座 看護倫理 医学書院 系統看護学講座 看護学概論 医学書院 参考書 身近な事例で学ぶ看護倫理 宮脇美保子 中央法規 サラ T、フライ 看護実践のための倫理 日本看護協会出版 看護に活かすバイオエシックス 木村利人 学研 ケースブック医療倫理 医学書院 *授業で提示・資料配布						
評価方法	筆記試験 60％・自己評価・ピア評価・グループ評価 出席状況・グループワーク・事例検討の取り組み状況で総合的に評価する。						

学科目 (単元)	看護技術論Ⅰ	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 30 時間	1 年	全期
目的	本科目では看護実践に必要な対象理解・問題把握・分析・介入立案・評価について、主体的学習姿勢を身につけ、問題解決思考、クリティカルシンキング、判断能力を培っていくことを目的とする。看護実践における思考プロセスを学び、後に学ぶ看護過程の基盤となる考え方を理解する。演習では、紙上事例の展開を行い、基礎看護実践論Ⅰでの看護展開に繋げることを目的とする。また、思考の表現手段としてのコミュニケーション力の向上を目指す。 医療は複雑かつ重複した業務を、実施しなくてはならず、エラーが発生しやすい環境である。また、看護師は患者の安全を守ることが責務である。「人は誰でも間違える」という視点を持ち、医療における事故について学び、危険を予測し、回避する基礎的な力を養う。						
到達目標	・看護は知識・思考・行動というステップを踏み提供されることを説明する。 ・対象に生じている問題の要因分析を行う。 ・問題解決思考過程を用いて対象に必要な看護を分析する ・演習を通して主体的学習能力、学び合う力、および判断力を培う。 ・医療安全を学ぶことの意義を説明する。 ・医療事故を自分自身に生じる身近な問題として捉える。 ・医療事故の要因がわかり、予防方法と事故発生時の対処方法を説明する。 ・起こりうる医療事故を予知する力の必要性和自己の危険予知能力の程度を認める。						
授業計画	<思考過程> (20 時間) 1. 看護実践の基盤となる考え方 ①問題解決過程 クリティカルシンキングとは 2. 看護実践の基盤となる考え方 ②倫理的配慮と価値判断、リフレクション 3. 看護を考えよう 考え方の流れ 経過記録1 4-11. 看護を考えよう 事例展開 ①～⑧ <医療安全> (8 時間) 1. 医療安全を学ぶ意義。実習で出会う危険と看護学生の責任 (基礎看護実践論Ⅰに向けて) 2. 事故発生のメカニズム 事故分析と予防策 3. 看護場面での事故対策 危険予知トレーニング。実習で出会う危険と看護学生の責任 (基礎看護実践論Ⅱに向けて) 15. 学習時間あり・単位認定試験						
教育方法	講義 グループワークで事例展開を進めます。						
履修上の助言	主体的な学習者として、自ら学ぶ姿勢を持って学習しましょう。本科目の内容だけでなく、これまで学習したことや自己学習の内容を活用して事例展開に臨みましょう。 協同学習を行います。他者との意見交換を活発に行い、学びを深めましょう。 基礎看護実践論Ⅰでは本授業の学習内容を用いて看護展開を行います。 看護技術論で学習するケア場面における安全の視点を復習しましょう。						
参考文献	ナーシング・グラフィカ 看護の統合と実践② 医療安全 メディカ出版 系統看護学講座 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 学習ガイドⅡ 本校 第一看護学科 ザ・ロイ適応看護モデル 医学書院 看護過程に沿った対象看護 学研						
評価方法	筆記試験・授業参加態度・提出課題 授業概要参照						

学科目 (単元)	看護技術論Ⅱ	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 30 時間	1 年	後期
目的	看護過程は看護実践の意思決定のプロセスである。専門職としてケアリングに基づいた、科学的で論理的思考による問題解決型アプローチを身につける必要がある。また、この授業をと おして学生が自ら調べ、考え、判断し、その結果に対して責任が取れる主体的学習姿勢を身に つけ、クリティカルシンキング、判断能力を培っていくことを目的とする。 看護実践はどのような思考プロセスによって、どのように判断され、実践されているのかを 問題解決型思考に基づく看護過程というとらえ方から理解する。演習では、紙上事例の展開を 行い、臨地実習での看護過程の展開に繋げることを目的とする。						
到達 目標	・看護を展開するための基本的な考え方を説明する。 ・看護の対象を全人的に把握し（ロイ適応看護モデルを活用）看護展開の方法を説明する。 ・看護実践の思考過程を用いて、事例の看護過程の一連のプロセスを展開する。 ・演習を通して主体的学習能力、学び合う力、および判断力を培う。						
授 業 計 画	1. 看護過程とは 看護過程を学習する意味 看護過程を展開する際に基盤となる考え方 2. 看護過程の段階① 第一段階アセスメント（情報収集・情報分析） 3-6. ロイのカテゴリーの意味：グループワーク 事例展開 第一段階：行動のアセスメント：グループワーク・発表 7. 看護過程の段階② 第二段階アセスメント（要因分析）・看護診断・優先順位 8-10. 事例展開 第二段階アセスメント・看護診断：グループワーク・発表 11. グループワーク・関連図・看護計画・評価 12 - 13. 事例展開：グループワーク・関連図・看護計画・評価 発表 14. 看護記録・SOAP の考え方 まとめ 15. 学習時間あり・単位認定試験						
教育 方法	講義 グループワークで事例展開を進めます。						
履修上の助言	看護技術論Ⅰで学んだ思考過程を基盤として展開します。協同作業のために必要な技術は、話を聴く・対話をする・相手を尊重する・話し合う・合意により意思決定をする・さまざまな意見を知る・各役割を知る等です。これらを意識しながらワークを進めてください。解剖・病態生理・看護学・心理学・社会学などの知識を活用し、わからないことはそのままにせずに、主体的に学んでください。看護の答えは一つではありません。対象にとって何が良い看護となるのか「考える」というプロセスが重要です。						
履修要件	看護技術論Ⅰ 2/3 以上出席						
テキスト・参考書	系統看護学講座 基礎看護技術Ⅰ ザ・ロイ適応看護モデル 看護診断ハンドブック 系統看護学講座 臨床検査 病態生理学 看護過程に沿った対症看護			医学書院 医学書院 医学書院 医学書院 医学書院 学研			
評価 方法	筆記試験 授業概要参照						

学科目 (単元)	看護技術論Ⅲ	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 30 時間	1 年	前期
目的	看護を行う上で、対象がどのような状態なのか把握するためには観察や情報収集がとても重要である。特にバイタルサイン測定は対象の身体状況を知るための基本的技術である。この授業では、対象の身体状況を知るために必要な、根拠のある適切なバイタルサイン測定の基本的技術を身につける。						
到達目標	・身体状態の必要な観察をする。 ・バイタルサイン測定の必要性を説明する。 ・根拠に基づき正確にバイタルサインを測定する。 ・バイタルサインの数値を正常か異常か判断する。 ・バイタルサイン測定を正確かつ適切に時間内に行えるように技術チェックを受けて、自己の課題を明確にする。						
授業計画	1. 看護における観察の意義 2. 生体におけるバイタルサイン 循環（体温・呼吸・脈拍） 3. バイタルサイン測定の実際 演習（体温・呼吸・脈拍） 4. バイタルサイン測定の実際 演習（体温・呼吸・脈拍） 5. 生体におけるバイタルサイン 循環（血圧） 6. バイタルサイン測定の実際 演習（血圧測定） 7. バイタルサイン測定の実際 演習（血圧測定） 8. バイタルサイン測定の一連の流れと報告について 9. バイタルサイン測定の実際 演習（一連のバイタルサイン測定） 10. バイタルサイン測定の実際 演習（一連のバイタルサイン測定） 11. バイタルサイン測定の実際 演習（一連のバイタルサイン測定） 12. 技術チェック（バイタルサイン測定） 13. 技術チェック（バイタルサイン測定） 14. まとめ 15. 学習時間あり・単位認定試験						
教育方法	講義・演習（シミュレーター使用）、技術チェック						
履修上の助言	解剖生理学の知識が必須となるので、関連臓器の解剖生理学の授業を復習して授業に臨みましょう。必要に応じ解剖生理学の教科書を持参することを勧めます。基礎看護実践論Ⅰでは受け持ち患者のバイタルサイン測定はかせません。正しい観察技術を身につけ、技術チェックに合格して実習に臨めるようにしましょう。演習の参加は必須です。授業時間以外にも積極的に技術練習を行って確実な技術を習得しましょう。 また、この科目は看護技術論Ⅳの基盤となる科目です。確かな技術を習得しましょう						
テキスト・参考書	系統看護学講座 基礎看護技術Ⅰ 看護がみえる Vol. 3 フィジカルアセスメント 看護につなげる形態機能学 系統看護学講座 解剖生理学			医学書院 メディックメディア メヂカルフレンド社 医学書院			
評価方法	筆記試験 技術チェック						

学科目 (単元)	看護技術論Ⅳ	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 30 時間	2 年	全期
目的	対象者の健康問題を把握するために必要な看護技術であるフィジカルイグザミネーションについて学ぶ。問診・視診・聴診・触診による情報収集の方法を習得する。また、観察した情報を分析・判断し、対象の身体状況をアセスメントする。これらの過程を通し、看護技術を提供するために必要な対象の身体状況を把握するための基礎的技術・知識・思考・態度について学習する。						
到達目標	・身体状態の把握のために必要な観察をする。 ・フィジカルイグザミネーションの必要性を説明する。 ・身体状態を把握するための情報を、正しい技術で収集する。 ・正しい部位と方法で呼吸音・心音・腸蠕動音を聴取する。 ・フィジカルアセスメントとは何か、看護における意義を説明する。 ・フィジカルイグザミネーションで得られた身体的情報の正常・異常を判断する。 ・得られた情報に基づいて対象の身体状態を分析する。 ・分析した身体状態から対象に必要な看護の方向性を見出す。 ・グループで教え合い、学び合い、高め合っていける関係性（協同学習の姿勢）を築く。						
授業計画	1. フィジカルアセスメントの目的と意義 2. フィジカルアセスメントの基本（問診・触診・打診・聴診） 3. 呼吸器系フィジカルアセスメント 4. 循環器系のフィジカルアセスメント 5. 腹部・消化器系のフィジカルアセスメント 6－8. 演習・技術チェック 9. 筋・骨格系のフィジカルアセスメント 10. 神経系のフィジカルアセスメント 11－12. フィジカルアセスメントの実際 ～事例をもとに情報収集する内容を検討する～（演習に向けた準備） 13－14. 事例から考えたフィジカルアセスメントの発表（まとめ） 15. 学習時間あり・単位認定試験						
教育方法	講義・グループワーク・シミュレーターを使用した演習						
履修上の助言	看護技術論Ⅲで習得したバイタルサイン技術が基盤となります。 フィジカルアセスメントでは科学的根拠のある観察力が要求されます。 看護師の観察力・判断力・行動力そのものが、その後の対象の健康状態に大きく影響します。 今まで学習してきた解剖生理学・人体形態機能学・病態生理学・コミュニケーション技術・看護技術論Ⅲで学習したバイタルサイン測定技術などを復習して授業に臨みましょう。 また、この科目は全ての看護方法論の基礎となります。基礎看護実践論Ⅲではフィジカルイグザミネーション技術を用いて対象理解に務めます。授業内ではグループワークを行います。 事前学習や必要な教材の準備をして臨みましょう。						
履修要件	看護技術論Ⅲ 単位修得 基礎看護実践論Ⅱ 単位修得						
テキスト・参考書	系統看護学講座 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 系統看護学講座 循環器 呼吸器 消化器 脳・神経 運動器 医学書院 看護過程に沿った対症看護 学研 看護がみえる Vol. 3 フィジカルアセスメント メディックメディア						
評価方法	筆記試験 技術チェック 授業態度・グループワーク取り組み状況 詳細は授業概要参照						

学科目 (単元)	看護技術論Ⅴ	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 15 時間	1 年	前期
目的	健康障害を抱えている人は、抵抗力が低下し感染の危機に脅かされている。感染成立のしくみや感染予防策の知識を習得することは、患者を感染から守るだけでなく、自分自身を守ること、仲間を守ることにつながることを理解し、対象の健康回復への支援のために必要な知識と技術を習得する。						
到達目標	・標準予防策（スタンダードプリコーション）を正確に実施する。 ・感染成立の条件及び院内感染防止の基本を説明する。 ・看護師が感染防止のための実践を行うことの重要性を述べる。 ・無菌操作について学び正しく実施する。 ・無菌操作の原則に基づき創傷処置を実施する。						
授業計画	1. 感染防止の基礎知識、標準予防策、感染経路別予防策（講義） 2. 標準予防策（手指消毒・ガウン・マスク）（演習） 3. 洗浄・消毒・滅菌の基礎知識、滅菌物の取り扱い（講義・演習） 4. 無菌操作（滅菌包装、滅菌鑷子、滅菌ガーゼ、滅菌ガウン、滅菌手袋の取り扱い）（演習） 5. 創傷管理の基礎知識（講義） 6. 創傷処置の実際（創洗浄と創保護、包帯法）（講義） 7. 基本的な創処置（演習） 8. 単位認定試験（学習時間なし）						
教育方法	講義・演習						
履修上の助言	感染防止技術は全ての看護技術に共通して必要な技術であるため、正しく実践できるようにしていきましょう。 基礎看護実践論Ⅱで本科目での学習内容を活用します						
テキスト・参考書	系統看護学講座 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 系統看護学講座 基礎看護技術Ⅱ 医学書院 系統看護学講座 臨床看護総論 医学書院 根拠と事故からみた基礎・臨床看護技術 医学書院 看護のための感染防止アドバンス インターメディカ						
評価方法	筆記試験 詳細は授業概要参照						

学科目 (単元)	看護技術論VI	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 30 時間	1 年	前期
目的	人々にとって適切な環境や活動・休息をすることの意義を学び、健康維持・増進のために必要な環境調整や活動・休息への援助技術を習得する。						
到達目標	・環境・活動と休息が人の健康に与える影響について説明する。 ・療養環境を快適に整備するための要点を述べる。 ・基本に則りベッドメイキング及び臥床患者のシーツ交換を実施する。 ・ボディメカニズムを用いて患者の体位変換を行う。 ・安全・安楽に留意し車いす・ストレッチャー移送を行う。 ・良質な睡眠をとるための援助方法を説明する。						
授業計画	1. 環境とは① (講義) 2. 3. ベッドメイキング (演習) 4. 環境とは② (講義) 5. 環境整備 (演習) 6. 活動とは① (講義) 7. 8. 体位変換 (演習) 9. 活動とは② (講義) 10. 11. 移乗・移送・歩行の援助 (演習) 12. 休息とは (講義) 13. 14. 知識と技術のまとめー臥床患者のシーツ交換ー (演習) 15. 学習時間あり・単位認定試験						
教育方法	講義・演習およびリフレクション・協同学習						
履修上の助言	環境・活動と休息が人の健康に与える影響について科学的に考え、根拠をもって環境調整・活動と休息の援助ができるように技術を習得しましょう。自分を取り巻く環境に興味を持ち、その意味を考えることで学習が深まります。 また、活動と休息の援助を考えるためには解剖生理学や物理学の知識も活用します。既習内容をどのように活用するのか、考えながら演習に取り組みましょう。 演習前には事前学習を行い、演習後はリフレクションを行いながら、自らの課題を明らかにして知識・技術の定着を目指しましょう。 看護技術論Ⅶ・Ⅷ・Ⅸや、基礎看護実践論で本科目の内容を活用しますので、要点をまとめておくことを勧めます。						
参考文献	系統看護学講座 基礎看護技術Ⅱ 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 医学書院 医学書院						
評価方法	筆記試験 提出課題						

学科目 (単元)	看護技術論Ⅶ	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 30 時間	1 年	前期
目的	生理的欲求の 1 つである清潔のニーズを満たすために、清潔の援助は看護師が行うことの多い援助である。この授業では根拠に基づきながら、清潔援助に関する基本的な知識と技術を習得する。						
到達目標	・ 身体の清潔・衣生活の意義・目的を説明する。 ・ 清潔援助の基本的知識を学び、援助方法を選択する視点を述べる。 ・ 安全・安楽・自立を考慮した援助を手順に基づいて実践する。 ・ 講義・演習での経験を通して、倫理的な姿勢や態度に気づきを示す。						
授業計画	1. 清潔の基礎知識（講義） 2. 部分浴【手浴・足浴】（講義） 3. 部分浴【手浴・足浴】（演習） 4. 部分浴【手浴・足浴】（演習） 5. 洗髪（講義） 6. 洗髪（演習） 7. 洗髪（演習） 8. 全身清拭・寝衣交換（講義） 9. 全身清拭・寝衣交換（演習） 10. 全身清拭・寝衣交換（演習） 11. 全身清拭・寝衣交換（演習） 12. 陰部洗浄（講義） 13. 陰部洗浄・おむつ交換（演習） 14. 陰部洗浄・おむつ交換（演習） 15. 学習時間あり・単位認定試験						
教育方法	講義・演習・リフレクション・グループワーク						
履修上の助言	身体清潔の意義を理解するためには、解剖生理学（外部環境からの防御）の知識が必要です。演習への参加は必須であり、演習前に講義の復習、予習（手順書の作成、DVD の視聴など）を行なってから臨む事が重要です。また、看護技術の手順を覚えるだけではなく、“なぜそのような方法で行なうのか” 根拠を理解して臨んでください。授業時間以外にも自主練習を行ない、積極的にアドバイスを求め、基本的な援助技術を身に付けましょう。同時期に学習する看護技術論Ⅵ（ボディメカニクス、体位変換）の知識と関連させて学習を進めましょう。						
参考書	系統看護学講座 基礎看護技術Ⅱ 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 系統看護学講座 臨床看護学総論				医学書院 医学書院 医学書院		
評価方法	筆記試験 詳細は授業概要参照						

学科目 (単元)	看護技術論Ⅷ	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 30 時間	1 年	後期
目的	人間にとって基本的欲求である栄養と排泄の意味を考え、対象にとって安全・安楽な栄養摂取及び排泄の看護ができる知識と技術を習得することを目的としている。						
到達目標	・栄養状態や摂取能力などの基礎的知識を習得し、アセスメントの視点について述べる。 ・食事介助の具体的な方法を学び、援助を実施する。 ・排泄に関する観察とアセスメントの視点について述べる。 ・様々な排泄援助の方法の基礎的知識を習得し、根拠に基づいた排泄援助を実施する。 ・食事介助や排泄援助を受ける対象の気持ちと配慮について考える。						
授業計画	【栄養：10 時間】 1. 栄養と食事の意義、食欲のメカニズムと影響を及ぼす因子 2. 消化吸収のメカニズム、栄養状態のアセスメントの視点 3. 経口的栄養摂取の食事介助（講義・演習） 4. 経口的栄養摂取の食事介助（講義・演習） 5. 食欲不振、体動制限のある対象への食事援助 非経口的栄養摂取の援助：経管栄養法 【排泄：18 時間】 1. 排泄に関連した臓器と機能、排泄の意義とメカニズム 2. おむつ交換・陰部洗浄（演習） 3. 尿器・便器の取り扱い、排泄援助の観察とアセスメント（演習） 4. 排泄障害時の看護（グリセリン浣腸・摘便の演習） 5. 排泄障害時の看護（グリセリン浣腸・摘便の演習） 6. 排尿障害時の看護 7. 排尿障害時の看護（一時的導尿の演習） 8. 排尿障害時の看護（一時的導尿の演習） 9. まとめ 15. 学習時間あり・単位認定試験						
教育方法	講義・演習・グループワーク						
履修上の助言	解剖生理（消化器系、泌尿器系の解剖生理）の復習が必要です。 必ず復習をして臨みましょう。 演習の参加はここでしか学べない貴重な経験になります。ぜひ参加しましょう。 今まで学習した看護技術論の復習をして臨みましょう。 様々な学習内容を関連づけて考えられることを目指しましょう。						
参考文献	系統看護学講座 基礎看護技術Ⅱ 看護過程に沿った対症看護 看護のための感染防止アドバンス 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術 系統看護学講座 臨床看護総論			医学書院 学研 インターメディカ 医学書院 医学書院			
評価方法	筆記試験						

学科目 (単元)	看護技術論Ⅸ	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 15 時間	1 年	後期						
目的	呼吸・循環・体温に異常が生じている患者は、心身ともに大きな苦痛を抱いている。そのような異常を軽減し、苦痛を緩和するための技術として、罨法・吸入・吸引・酸素療法の技術を習得する。												
到達目標	・罨法を根拠に基づいて選択し、その理由を説明する。 ・罨法を実施する時の注意点を根拠に基づいて説明する。 ・患者の呼吸状態をアセスメントする。 ・酸素吸入時の注意点とその時に必要な観察項目・ケアを説明する。 ・患者にあわせた排痰ケアを選択した理由を説明する。 ・根拠に基づいた吸引や酸素投与の技術を習得する。 ・吸引による苦痛に対して気づきを示す。												
授業計画	【苦痛の緩和・身体の安楽を整える技術：4 時間】 1. 温罨法・冷罨法(炎症、罨法の効果、罨法による事故) 2. 温罨法・冷罨法(炎症、罨法の効果、罨法による事故) 【呼吸・循環を整える技術：10 時間】 1. 酸素療法（適応、合併症、必要な観察・ケア） 2. 排痰ケア(排痰しやすくなる要素、体位の調整、咳嗽法、深呼吸) 3 .吸入(吸入の効果、合併症) 4. （演習）酸素療法・吸引 5. （演習）酸素療法・吸引 8. 単位認定試験（学習時間なし）												
教育方法	講義・演習・グループワーク・視聴覚教材・シミュレーター												
履修上の助言	呼吸・循環・体温を司る解剖及びそのメカニズムについて復習が必要です。演習では手順だけでなく「何故その方法が必要なのか」といった根拠を理解した上で臨みましょう。看護技術論Ⅳの学習と関連しているので、復習しておいて下さい。演習の参加は必須です。												
テキスト・参考書	<table><tr><td>系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護技術Ⅱ</td><td>医学書院</td></tr><tr><td>根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術</td><td>医学書院</td></tr><tr><td>系統看護学講座 専門基礎 解剖生理学</td><td>医学書院</td></tr></table>							系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護技術Ⅱ	医学書院	根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術	医学書院	系統看護学講座 専門基礎 解剖生理学	医学書院
系統看護学講座 専門Ⅰ 基礎看護技術Ⅱ	医学書院												
根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術	医学書院												
系統看護学講座 専門基礎 解剖生理学	医学書院												
評価方法	筆記試験												

学科目 (単元)	看護技術論Ⅹ	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 30 時間	2 年	全期
目的	検査・薬物療法（与薬）の目的や看護師の役割を理解し、安全・安楽に患者がその目的を達せられるよう援助する知識と技術を習得する。患者が安全で効果的に薬物療法を受けられるために必要な準備から実施・後始末の方法・観察事項など原理・原則に基づいて実践できる知識と技術を身につける。						
到達目標	・検査・与薬における看護師の役割を述べる。 ・検査・与薬における看護師として責任の重要性に対する気づきを示す。 ・根拠に基づく正確な方法を説明する。 ・薬物療法に必要な準備・実施・後始末を根拠に基づいて実践する。						
授業計画	【検査：10 時間】 1. 検査の目的と看護師の役割 2. 検査の種類と検体の取り扱い 検査時に起こりうる事故の要因と対策 3. 静脈血採血の手順と注意事項 医療者の感染防止 4. 静脈血採血の技術演習（演習） 5. 静脈血採血の技術演習（演習） 【与薬：20 時間】 1. 与薬の意義・与薬に関する基本的知識（講義） 2. 様々な与薬の作用機序・禁忌事項 3. 直腸内与薬・筋肉内注射・皮下注射 適応と部位 4. 筋肉内注射・皮下注射（演習） 5. 筋肉内注射・皮下注射（演習） 6. 静脈内注射・ワンショット・輸血（講義） 7. 静脈内点滴・輸液ポンプ・シリンジポンプの取り扱い方法・安全な与薬について（講義・GW） 8. 静脈内点滴・輸液ポンプ・シリンジポンプ（演習） 9. 静脈内点滴・輸液ポンプ・シリンジポンプ（演習） 15. 学習時間あり・単位認定試験						
教育方法	講義・演習 ペアワーク・グループワークを取り入れ、学習します。						
履修上の助言	解剖生理学、看護技術論Ⅵの復習。演習前には講義の復習、予習（手順書の作成、テキストの動画を視聴）を行ってから臨みましょう。侵襲度の高い看護技術です。看護者としての責任を自覚しながら演習に参加しましょう。 与薬（輸液管理）の授業には、比と単位換算（時間、容積、重量）の計算方法を復習し、理解して臨んでください。						
テキスト参考書	系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護技術Ⅱ 看護のための感染防止アドバンス 根拠と事故防止からみた基礎・臨床看護技術			医学書院 インターメディカ 医学書院			
評価方法	筆記試験						

学科目 (単元)	看護技術論XI	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 15 時間	2 年	後期
目的	人々のヘルスプロモーションを支援するために、健康教育における基礎的知識・技術を習得する。						
到達目標	・ヘルスプロモーションの定義と目標を説明する。 ・ヘルスプロモーション活動に価値を見出す。 ・ヘルスプロモーションと健康教育を関連付ける。 ・対象者に必要な教育内容と方法を見出す。 ・対象者に効果的な健康教育を計画する。 ・計画に基づいて健康教育を実践する。						
授業計画	1. ヘルスプロモーションとは（講義） 2. 健康教育とは（講義） 3. 教育内容の抽出（講義） 4. 教育方法とプレゼンテーションスキル（講義） 5. 健康教育計画の立案（講義） 6. 7. 健康教育の実施と評価（演習） 8. 単位認定試験（学習時間なし）						
教育方法	講義・演習・リフレクション・協同学習						
履修上の助言	紙上事例のアセスメントを用いて、必要な健康教育について考えます。行動変容を促す看護について、成人看護学総論や保健行動科学で学習した内容を復習して授業に臨んで下さい。						
履修要件	看護技術論Ⅰ 単位修得 看護技術論Ⅱ 単位修得 基礎看護実践論Ⅰ 単位修得 基礎看護実践論Ⅱ 単位修得						
テキスト 参考書	系統看護学講座 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 ナーシング・グラフィカ 成人看護学概論 メディカ出版 ナーシング・グラフィカ セルフマネジメント メディカ出版						
評価方法	筆記試験 課題提出 その他						

学科目 (単元)	基礎看護実践論Ⅰ	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 45 時間	1 年	前期
目的	看護活動の見学を通して、看護の役割と機能、実際について気づき、療養する人々に対する理解を深める。 受け持ち患者の生活を知り、必要な看護を実践するための能力を養う。						
到達目標	・ 看護師の行動を通して看護活動の実際と役割について述べる。 ・ コミュニケーション技術を活用して、患者の思いに気づく。 ・ 疾患や健康障害が患者の生活に及ぼす影響を述べる。 ・ 患者の問題解決のために必要な看護を立案する。 ・ 患者の状況に応じた安全・安楽・自立を考え、看護を実践する。 ・ 自らの経験をふまえ、看護とは何かを自分の言葉で述べる。						
授業計画	【学内】 1. オリエンテーション 2. 実習 3 日目記録指導 3. まとめ 【臨地】 1 実習時間：60 分 1. 実習病棟の特殊性を知る。 2. 担当看護師と共に行動し看護活動を見学する。 3. 受け持ち患者とコミュニケーションを図る。 4. 受け持ち患者の看護に必要な情報を収集する。 5. 思考過程を活用して、受け持ち患者に必要な看護を見出す。 6. 患者の安全・安楽・自立を考え援助を実施する。 7. 実習での学びを振り返り、看護について自分の考えを表現する。						
教育方法	臨地実習						
履修上の助言	看護技術論Ⅰの学習を基に看護を展開します。看護技術論Ⅰの授業内容を十分に理解・復習した上で履修しましょう。 基礎看護実践論Ⅰはバイタルサイン測定 of 技術は必須となります。積極的に技術練習を行い、正しい技術を身に付けて実習に臨みましょう。 実習開始前は健康管理のために適切な行動を心がけましょう。						
履修要件	看護技術論Ⅰ 2/3 以上出席 看護技術論Ⅲ 2/3 以上出席						
テキスト・参考書	系統看護学講座 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 系統看護学講座 基礎看護技術Ⅱ 医学書院 根拠と事故防止からみた基礎・臨床 看護技術 医学書院 看護がみえる Vol. 3 フィジカルアセスメント メディックメディア						
評価方法	実習評価表 参照						

学科目 (単元)	基礎看護実践論Ⅱ	講師名	学内教員	単位 (時間)	2 単位 90 時間	1 年	後期
目的	患者・看護師間の相互関係の構築を基盤に、受け持ち患者に必要な看護を考え実践する。また、実践を通して看護過程のアセスメントの考え方を学ぶ。						
到達目標	・看護者として対象に関心をもち、信頼関係を築く。 ・受け持ち患者の健康問題の状況から、看護の視点で情報を収集する。 ・患者にとって望ましい変化をもたらすために必要な看護を立案する。 ・受け持ち患者の反応や状況を確認しながら、安全・安楽・自立を考慮し看護技術を実践する。 ・本校の看護展開過程（ロイの適応モデル）を用いて受け持ち患者の看護診断を見いだす。 ・自身の看護実践を振り返り看護観を深める。						
授業計画	基礎看護実践論Ⅱ 【学内】 1. オリエンテーション 2. まとめ 【臨地】1 実習時間 45 分 1. 病棟の特殊性と対象の生活環境を知る。 2. 対象に必要な情報を収集する。 3. 情報を整理し対象の状況をアセスメントする。 4. アセスメントから対象の看護診断を導き出す。 5. 対象に必要な看護を考え実施・評価する。 6. 実習を自己評価し、今後の学習課題を明確化する。						
教育方法	臨地実習						
履修上の助言	基礎看護実践論Ⅰの目標に到達した上で履修しましょう。 看護技術論Ⅰ・Ⅱの学習を基に看護過程を展開します。実習時間だけではなく、日々の自己学習が必要になります。時間を確保し、主体的な学習を行いましょう 実習開始前は健康管理のために適切な行動を心がけましょう。						
履修要件	看護技術論Ⅰ 2/3 以上出席 看護技術論Ⅱ 2/3 以上出席 基礎看護実践論Ⅰ 履修						
テキスト・参考書	系統看護学講座 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 系統看護学講座 基礎看護技術Ⅱ 医学書院 根拠と事故防止からみた基礎・臨床 看護技術 医学書院 ザ・ロイ適応看護モデル 医学書院 看護診断ハンドブック 医学書院						
評価方法	実習評価表 参照						

学科目 (単元)	基礎看護実践論Ⅲ	講師名	学内教員	単位 (時間)	2 単位 90 時間	2 年	前期
的 目	看護過程の展開を通して、対象に適した看護を実践するための能力を養う。						
到達 目標	・状況に応じて、対象に適したコミュニケーションを活用し、信頼関係を築く。 ・受け持ち患者を身体的・心理的・社会的に統合した存在として捉える。 ・看護過程を展開し、対象にとって望ましい変化をもたらすために必要な看護を立案する。 ・対象の反応や状況を確認めながら、安全・安楽・自立を考慮し看護技術を実践する。 ・自身の看護を振り返り、意味づけをする事で看護観を深める。						
授業 計画	【学内】 1. オリエンテーション 2. まとめ（看護計画・看護観の発表） 【臨地】 1. 病棟の特殊性と対象の生活環境を知る。 2. 対象に必要な情報を、適切な方法を用いて意図的に収集する。 3. 情報を整理し対象の状況をアセスメントする。 4. アセスメントから対象の看護診断を導き出す。 5. 対象に必要な看護を立案し実施・評価する。 6. 実習を自己評価し、今後の学習課題を明確化する。 7. 自身の看護を振り返り、「看護とは何か」考える。						
教育 方法	臨地実習						
履修 上の 助言	事前学習や技術練習に励み十分準備をして実習に臨みましょう。既習学習だけでなく、対象に必要な学習を進んで行いましょう。 看護過程の展開に関する復習を行い、必要に応じて事前にアドバイスを受けましょう。 主体的学習者として自身の考えを積極的に述べましょう。 実習開始前から健康管理のために適切な行動を心がけましょう。						
履修 要件	看護技術論Ⅰ～Ⅲ・Ⅴ～Ⅸ単位修得 看護技術論Ⅳ 2/3 以上出席 基礎看護実践論Ⅰ 単位修得 基礎看護実践論Ⅱ 単位修得						
テキ スト・ 参考 書	系統看護学講座 基礎看護技術Ⅰ 医学書院 系統看護学講座 基礎看護技術Ⅱ 医学書院 根拠と事故防止からみた基礎・臨床 看護技術 医学書院 ザ・ロイ適応看護モデル 医学書院 看護診断ハンドブック 医学書院						
評価 方法	実習評価表 参照						

地域・在宅看護論

1. 考え方

今後長期的な日本の人口動向を予測した「将来推計人口」によると、2060年の日本の人口は674万人と10年比32%、4132万人減少すると試算した。65歳以上が5人に2人を占める他、生産年齢人口が減少し、少子高齢化が加速する。そのため、人口および疾病構造の変化に応じた医療提供体制の整備が急務であり、地域包括ケアシステムの推進にむけ、地域に目を向け活躍できる人材を育成する必要がある。

地域に暮らす人々の看護は、看護の土台ともいえるものである。地域・在宅看護論では、従来の在宅看護論から対象や場の拡大を図り、「地域」における看護実践を拡充し、個人、家族を看護の対象として、健康や暮らしを支援するために生活の基盤である地域を理解する。地域で暮らしながら、病気を発症し、必要な治療を受け、病気と共に地域で暮らす場合もある。また、病気を発症せずにそのまま暮らし続けることもある。そのため、地域で健康と暮らしを支える予防的な看護も学習内容とする。

看護を展開する場は居宅も含め地域で暮らす人すべてが対象となる。療養者・家族を生活者としてとらえ、その人が望む、その人らしい生活ができるよう支援するものである。そのためには、一次予防を含めた健康の保持増進を支援するだけでなく、健康問題を抱えて生活している療養者や家族の理解を深め、それぞれの持つセルフケア能力、考え方や価値観、強みを尊重しながら看護に活かす必要がある。それらの基盤が自らの健康を管理し、健康寿命を全うして生き抜く力「自助」を支援する看護である。また「互助」である家族や近隣の人々との繋がりである「互助」の推進が重要である。

家族を含め多職種の人と協働することが必要なため、医療・介護・福祉チームの一員として看護師の役割を果たすことが求められる。

以上をふまえ、地域・在宅看護論では療養者、家族の理解を深めていくと共に、生活者として地域で暮らす人と理解し、看護を地域包括ケアシステムの中で実践できる基本的な知識、態度を養うことを目指し講義及び実習を構成した。

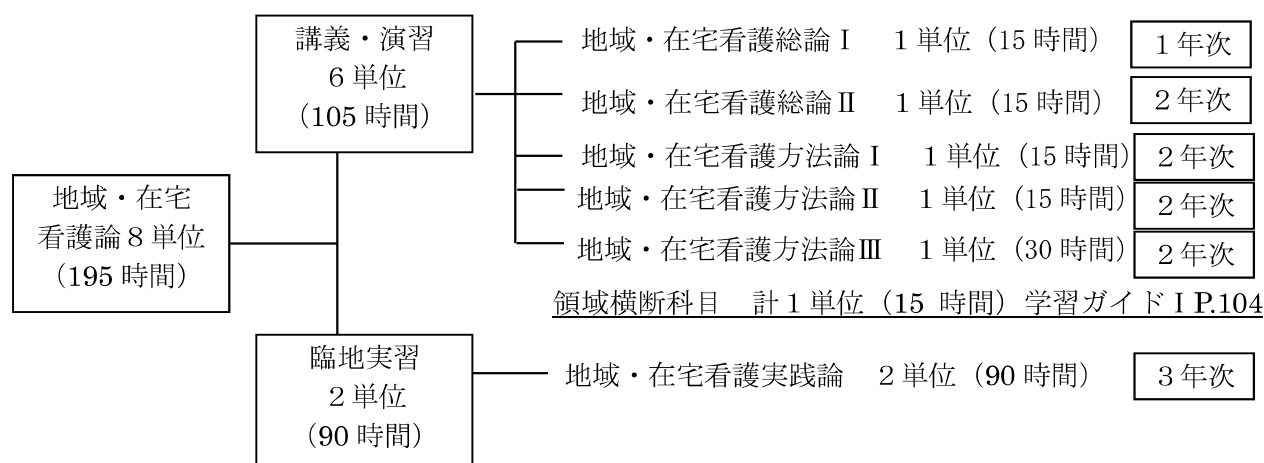
2. 地域・在宅看護論の目的

地域包括ケアシステム等を促進するために、地域に暮らす人々と共に生活する人々とその家族のセルフケア能力、強みを理解し、健康と暮らしを継続的に支援する能力を育成する。

3. 地域・在宅看護論の目標

- 1) 地域で生活する人を理解するとともに、暮らしが健康に与える影響を理解する。
- 2) 地域で生活する療養者や家族を支援するための、医療・保健・福祉制度を理解する。
- 3) 地域で生活する療養者・家族の生理的・心理的・社会的特徴を理解する。
- 4) 療養者・家族のセルフケア能力、強みに応じた看護について学ぶ。
- 5) 地域包括ケアシステムにおける看護師の役割を理解する。
- 6) 地域・在宅看護において必要な態度やマナーを習得する。

4. 構成



学科目 (単元)	地域・在宅看護総論Ⅰ	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 15時間	1 年	前期
目的	地域に暮らす人々の看護は、看護の土台ともいえるものである。地域・在宅看護論では、従来の在宅看護論から対象や場の拡大を図り、「地域」における看護実践を拡充し、個人、家族を看護の対象として、健康や暮らしを支援するために生活の基盤である地域を理解する。地域で暮らしながら、病気を発症し、必要な治療を受け、病気と共に地域で暮らす場合もある。また、病気を発症せずにそのまま暮らし続けることもある。そのため、地域で健康と暮らしを支える看護を学習内容とする。						
到達目標	・在宅看護の歴史、社会情勢の一部を取り入れ在宅における課題をまとめ提出する。 ・在宅看護における大切にしたいものを自分の言葉でレポート記入する。 ・在宅看護（居宅以外の施設内看護や地域）について看護師が支援すべき内容を説明する。 ・地域包括ケアシステムを言葉または図で記入する。 ・社会保障制度や訪問看護ステーションの法的根拠など、国家試験問題を8割正答する。 ・訪問看護ステーションの設立を自身で取り組んでまとめる。						
授業計画	1-2. 地域・在宅看護論の対象 地域に暮らすすべての人々 3. 健康と暮らしを支える看護 生活とかかるお金 地域包括ケアシステムにおける看護の役割 自助・互助・共助・公助の意義と役割 多職種連携、協働の意義と方法 4. 看護が提供される多様な場 病院（外来、入院）、診療所、居宅（自宅、施設）、療養通所介護事業所 訪問看護ステーション、介護施設、老人保健施設、介護医療院など 5-6. 地域・在宅看護論に関連する法制度と施策 訪問看護ステーション 医療保険・介護保険制度・権利保障に関する法や施策 7. 地域で暮らし続けることを支援するためのマネジメント 自己決定支援（ACP） ケアマネジメントの必要性 インフォーマルネットワークの維持 8. 単位認定試験（学習時間なし）						
教育方法	講義、グループワーク、視聴覚学習						
履の助言	生活者の理解とソーシャルマナーの授業内容を復習してください。						
テキスト・参考書	ナーシンググラフィカ 在宅看護論1 地域療養を支えるケア メディカ出版 医療福祉サービスガイドブック 医学書院						
評価方法	筆記試験 提出物						

学科目 (単元)	地域・在宅看護総論Ⅱ	講師名	学内教員	単位 (時間)	1 単位 15時間	2 年	前期
目的	総論Ⅰで学んだ学習を基に看護を展開する場合は居宅も含め地域で暮らす人すべてが対象となる。療養者・家族を生活者としてとらえ、その人が望む、その人らしい生活ができるよう支援する、一次予防を含めた健康の保持増進を支援するだけでなく、健康問題を抱えて生活している療養者や家族の理解を深め、それぞれの持つセルフケア能力、考え方や価値観、強みを尊重しながら看護に活かす必要がある。自助、互助を推進できる看護を学習内容とし、家族理論の基本を学ぶ。						
到達目標	・退院後の生活を想起し、自助・互助・共助の視点で記入する。 ・様々な視点で家族を理解する必要性に気づける。 ・看護職として在宅療養に必要な支援を考え記入する。 ・在宅看護の対象者について説明できる。 ・健康問題が家族におよぼす影響を考える。 ・円環的關係、システムの構造をもつ家族の特徴、理論を活用して説明する。 ・家族を看護する目的を説明する。 ・介護という課題に対する家族の適応状態を把握するために必要な情報収集の視点について説明する。 ・在宅看護の特徴をふまえた、家族看護過程の全体像を説明する。 ・家族のセルフケア能力を把握するために必要な情報を整理して記入する。						
授業計画	<家族を理解するための看護> 1-2. 地域・在宅看護論の対象 家族、家族を支える看護 3-4. 健康の保持増進・疾病の予防に関わる看護 ジェノグラム・エコマップ、家族システム理論 家族ストレス対処理論、セルフケア理論の活用 <対象、家族を支援するための看護過程・強みを活かした看護過程> 5-6. 地域で療養生活を送る人と家族のアセスメント ヘルスアセスメント、病態・症状のアセスメント 家族のアセスメント、生活のアセスメントの実際 7. 事例をもとに看護過程の展開 8. 単位認定試験（学習時間なし）						
教育方法	講義、グループワーク						
履修の助言	在宅看護総論Ⅰ、生活者の理解とソーシャルマナーについて理解し授業に臨むことが望ましいです。						
履修要件	生活者の理解とソーシャルマナー 単位修得 地域包括ケアシステム論 単位修得 地域・在宅看護総論Ⅰ 単位修得						
参考文献・テキスト	ナーシンググラフィカ 在宅看護論 1 地域療養を支えるケア メディカ出版 ナーシンググラフィカ 在宅看護論 2 在宅療養を支える技術 メディカ出版 医療福祉サービスガイドブック 医学書院 国民衛生の動向 厚生統計協会						
評価方法	筆記試験 提出物						

学科目 (単元)	地域・在宅看護方法論Ⅰ	講師名	外来講師	単位 (時間)	1 単位 15時間	2 年	前期
目 標	地域で生活するすべての人（発達段階）や疾病、状況に応じた看護の役割の実際を学ぶ。訪問看護ステーションでの取り組みを学ぶことで生活者を時間軸で捉え、生活者としてのイメージ化を促す。それにより対象のニーズ、関心ごと、健康問題を捉えて解釈し、統合的に把握できることを目標とする。						
到達目標	・療養者・家族への接近方法、観察方法を説明する。 ・地域における日常生活援助の方法・留意点等を説明する。 ・療養者の状態別の支援内容・方法を説明する。 ・在宅において医療的な管理が必要な療養者の看護について説明する。 ・地域における災害時の対応につちえ説明する。						
授業計画	1. 療養者・家族へ接遇、在宅における観察方法（災害時の対応含む） 2. 訪問看護ステーションの役割 対象者とのコミュニケーションの実際 ヘルスアセスメントの必要性 接遇の重要性 3. 訪問看護の実際（栄養：食事、胃ろう、在宅静脈栄養法：点滴、皮下注射、ポート） 4. 訪問看護の実際（排泄：膀胱留置カテーテル、ストーマ管理） 5. 訪問看護の実際（清潔・活動：リハビリ、ADL） 6. 訪問看護の実際（多職種との連携方法） 7. 訪問看護の実際（在宅酸素療法・人工呼吸器管理） 8. 単位認定試験（学習時間なし）						
教育方法	講義 演習						
履修上の助言	在宅看護総論Ⅰ、Ⅱの授業内容を復習して臨んで下さい。						
テキスト・参考書	ナーシンググラフィカ 在宅看護論 1 地域療養を支えるケア メディカ出版 ナーシンググラフィカ 在宅看護論 2 在宅療養を支える技術 メディカ出版						
評価方法	筆記試験						

学科目 (単元)	地域・在宅看護方法論Ⅱ	講師名	外来講師	単位 (時間)	1 単位 15時間	2 年	前期
目的	地域で生活するすべての人（発達段階）や疾病、状況に応じた看護の役割の実際を学ぶ。実際の地域での看護の取り組みを学ぶことで生活者を時間軸で捉え、生活者としてのイメージ化を促す。特に退院支援からターミナル期までを見据えた看護の実践の具体を学ぶ。それにより対象のニーズ、関心ごと、健康問題を捉えて解釈し、統合的に把握できることを目標とする。						
到達目標	・在宅療養の意義と役割を説明する ・地域における日常生活援助の方法・留意点等を説明する。 ・療養者の状態別（退院時、安定期、リハビリ期、急性増悪期）の支援内容・方法を説明する。 ・在宅において医療的な管理が必要な療養者（認知症、難病など）の看護について説明する。 ・在宅における終末期看護について考える。						
授業計画	暮らしの場で行われる治療と看護 1. 在宅療養の意義と役割 介入時期と看護の継続性 治療の場からの移行期 在宅療養の安定期 在宅リハビリテーション期 急性増悪期 2. 認知症の療養者に対する看護 3. 栄養摂取のアセスメント 4. 災害と感染予防について 5. 神経難病（ALS）の療養者に対する看護 6-7. 在宅における終末期看護 終末期 グリーフケア 継続看護の意義と方法 8. 単位認定試験（学習時間なし）						
教育方法	講義 演習						
履修上の助言	在宅看護総論Ⅰ、Ⅱの授業内容を復習して臨んで下さい。						
テキスト・参考書	ナーシンググラフィカ 在宅看護論 2 在宅療養を支える技術 メディカ出版						
評価方法	筆記試験						

学科目 (単元)	地域・在宅看護方法論Ⅲ	講師名	学内教員： 22時間 外来講師： 8時間	単位 (時間)	1 単位 30時間	2 年	後期
目的	地域包括ケアシステムにおける看護師の役割を果たすための看護過程の展開を学ぶ。事例を用いながら問題解決思考、ICF、強みを活かした考え方を活かして展開していく。対象を尊重して多職種と連携する方法を考える学習内容とする。また、今の健康状態を適切にアセスメントし、対応方法を提案する能力を強化するためにもフィジカルアセスメント技術では演習を取り入れ学ぶ。						
到達目標	・在宅看護過程の展開演習を通し、必要な看護を導き出す考え方を説明する。 ・実習で体験する可能性が高い看護技術を、事例に合わせて実施する。 ・訪問者として、適切な態度・マナーについて説明する。 ・在宅における、他職種の支援について学び、それぞれの役割を説明する。 ・全授業を通して、在宅看護実践論に向けて、自己の学習課題を明確にする。						
授業計画	1. 授業内容のオリエンテーション・事例紹介 地域・在宅での生活支援のアセスメントとは 在宅看護過程の展開演習①（療養者の病態をアセスメント） 2. 在宅看護過程の展開演習②（療養者の生活をアセスメント） 3. 在宅看護過程の展開演習③（家族の介護力や生活、支援のアセスメント） 4. 在宅看護過程の展開演習④（家族の強み、セルフケア能力のアセスメント①） 5. 在宅看護過程の展開演習⑤（家族の強み、セルフケア能力のアセスメント②） 6. 在宅看護過程の展開演習⑥（家族の生活支援のアセスメントのまとめ） 7-8. 看護技術演習準備（在宅療養で実施する可能性が高い技術演習 接遇・技術） 9-10. 看護技術演習（在宅療養で実施する可能性が高い技術演習② 接遇・技術） 11-12. 在宅医療のとりくみ①（認知症高齢者と家族への支援の実際） 13-14. 在宅医療のとりくみ②（在宅における終末期医療の実際） 15. 学習時間あり・単位認定試験						
教育方法	講義、グループワーク、演習						
履修上の助言	生活者を支援することの意識を持って取り組んでください。 地域・在宅看護総論ⅠⅡ 方法論ⅠⅡの内容を必ず復習して授業に参加して下さい。 在宅看護実践論を履修する前年度に履修することが望ましいです。						
履修要件	看護技術論Ⅰ 単位修得 看護技術論Ⅱ 単位修得 地域・在宅看護総論Ⅰ 単位修得 地域・在宅看護総論Ⅱ 履修						
参考文献・テキスト	ナーシンググラフィカ 在宅看護論 1 地域療養を支えるケア メディカ出版 参考書 強みと弱みからみた 在宅看護過程 医学書院						
評価方法	筆記試験と授業態度（課題の取り組みやGW・演習の取り組み状況）により総合的に評価する。						

学科目 (単元)	地域・在宅看護実践論	講師名	学内教員	単位 (時間)	2 単位 90時間	3 年	全期
目的	地域の暮らしを理解するために、社会資源実習では福祉の場で暮らしの活動への介入を体験し、ノーマライゼーションの考え方、自助・互助・公助として人々が支えあって生きることの大切さを学ぶ。 また、訪問看護実習では、生活の場における看護師の役割である療養する人、家族の特性を理解し、QOLの向上とセルフケア能力の向上を目指した看護の実践を学ぶ。そのため、療養者の生活を支援する際の生活をアセスメントし、その人の強み、セルフケア能力を高められるアセスメントを展開し、多職種との行動について考える。まとめとしてグループワークで学びを共有して深める。						
到達目標	・地域で療養する人を支援する社会資源と多職種の役割を、既習学習を活用し説明する。 ・対象を地域で暮らす生活者として捉え、互助・共助の視点を持ち、看護師として支援のあり方を説明する。 ・地域で療養する人、家族（支える人）の健康上の問題や課題を見極めアセスメントする。 ・訪問看護に至る過程、問題解決の考え方とその人の強みを活かした支援方法を説明する。 ・地域で生活する人を支援する社会資源の活用、医療機関との連携、協働について学び、保健医療福祉チームの一員であることを説明する。 ・地域で生活する対象への看護のあり方を考え、医療者として接遇を実践する。						
授業計画	在宅療養をサポートする施設において実習し、在宅看護の対象となる人々に対する理解を深め、看護の役割を考えるため、下記の内容を実習する。 1 実習時間45分 【学内学習：9時間】 1.実習内容及び実習施設のオリエンテーション 2.看護過程の展開 3.実践論のまとめ 【社会資源実習：障害者通所施設実習・特別支援教育課：36時間】 1.在宅療養者を支援する社会資源と多職種の役割について 【訪問看護ステーション・多機能型実習：45時間】 1.療養者と家族の身体的、精神的、社会的特徴について 2.療養者が在宅で療養生活を送るために必要な看護について 3.家族に必要な看護について 4.在宅療養を支援する他のサービス・職種との連携について 5.地域で働く看護師としての心構えについて 6.安定した在宅療養を継続するために必要な看護師の役割について						
教 育 方 法	臨地実習						
履 修 の 助 言	在宅看護総論Ⅰ、Ⅱ、在宅看護方法論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの授業内容を復習し、理解をして実習に参加して下さい。 必要な事前学習、記録類などは指定された期日に提出して下さい。 一人での行動が多くなります。看護学生として主体的な学びを期待されています						
・ テ キ ス ト 参 考 書	ナーシンググラフィカ 在宅看護論 1 地域療養を支えるケア メディカ出版 ナーシンググラフィカ 在宅看護論 2 在宅療養を支える技術 メディカ出版 在宅看護総論Ⅰ、Ⅱ、在宅看護方法論Ⅰ、Ⅱの授業資料 その他、地域・在宅看護の健康問題を理解するために必要な教科書及び資料						
評 価 方 法	実習評価表 参照						